

優秀賞

おぼんで学んだこと

土庄町立土庄小学校三年 天満 友莉亜

シャワシャワシャワー。夏の朝はセミの大合しようでわたしは目をさます。それからベットの上でぐーんとのびをして起きる。何のへんてつもない一日が始まる。

でも、ドラマを見るようなしんこくな場面がとつぜんやって来た。

それは、去年の夏の事。大好きだったひいばあちゃんがなくなつた。

いつもとちがう朝。バタバタバタとあわただしい音でわたしは目がさめた。

「ひいばあちゃんが息を引き取つたんだよ。」

と、お母さんに言われてもわたしはピンとこなくて、

「死んだの？」
と、もう一度お母さんの顔を見ると、

目にはいっぱいなのみだ。わたしの足は急にガクガクふるえ、エレベーターで真つ暗やみをずっとずっと落ちていく感じがしてこわかつた。

式場につくと、ひいばあちゃんはきちんとふとんにねかされていた。ひいばあちゃんは高れい者のしせつに入っていた。少し前に会いに行った時はニコニコした顔でいっぱい話しかけてくれた。

顔にかけられた白いぬのをめくると、そこにはべつ人のように小さくなってしまったひいばあちゃんがいた。わたしの目からは、なみだがあふれ、それからずっと止まらなかった。

「ばあちゃんきたよ。目を開けて、こえをきかせてよ。」

何度よびかけても返事はなかった。いつもわたしのそばで、

「えらいえらい。大じょうぶ。がんばれがんばれ。」

とやさしくおうえんしてくれていた人はもういない。そこにあるのは、青白い顔とつめたくなつた体だけ。人の死というのは、こういうことなんだ。はじめてきようふを感じた夏だった。その後の事は、つらくて悲しくて、あまりおぼえていない。なきすぎて、目ははれていたかつたのはおぼえている。

さい後のおわかれ、わたしはきちんときたかな。ありがとうの気持ち伝わつたかな。後になって反せいばかりだった。

あれからあつという間に日はすぎて、
「今年の夏はひいばあちゃんのはつぼんだからを手伝つてな。」

夏休みに入つてすぐにお母さんに言われた。

おぼんって一体何をするのだろう。親せきが集まつていっしょにごはんを

食べること？何か買物にでも行くのかな？一人でいろいろ考えていたら、お母さんが教えてくれた。

「ご先ぞ様が家に帰ってくるんよ。ひいばあちゃんも。感しゃして、くようしてあげる日なんだよ。」

お母さんはうそつきだ、とわたしは思った。死んだ人が帰ってくるはずがない。すると、

「たましいがね、おぼんの間だけ大切な人のところへもどれるの。」

それを聞いて、わたしのむねはドキドキした。大すぎだったひいばあちゃんが帰ってくる。うれしくて、本当にうれしくて、お母さんといっしょに、おむかえのじゅんびをがんばった。

きゅうりとなすでしょうりょう馬を作りながら、新かん線よりも早く帰ってきてねとねがった。おぜんもおいしくなあれと言いながら作ったけれど、お肉や魚ではなく、野菜や海そう、豆ばかりであまりおいしそうではない。これはしょうじん料理と言って、ぶっ教の教えで、生き物をころしてはいけないきまりらしいから仕方がない。

おだん子作りはとでもとく意だ。小さいころからひいばあちゃんと作って、よく食べていたからだ。おそなえしたら、ひいばあちゃんはずつ対によるこんでくれる。

夕方、ろうそくとちようちんに火を点けて、

「おかえり。」

ぼんだなの前で、わたしは大声でさけんだ。ろうそくの火がゆらゆらゆれた気がした。写真にうつったひいばあちゃんの顔を見たら、

「ただいま。」

と、わたしにっこりわらってくれた気がして、うれしかった。それから、学校のこと、お兄ちゃんとけんかしたこと、テレビ番組のこと、いっぱいっばいぼんだなの前で話をした。それからさい後に、ありがとうを伝えた。

わたしは思った。毎日同じ日はない。そこにいるのが当たり前になつてしまつて、大切なことが伝えられなかった。明日にはその人はいないかもしれない。だから今、目の前にいる大切な人には感しゃや、自分の気持ちをしっかりと

伝えよう。

おぼんさい後のおわかれをする日、わたしはもう前みたいになかなかつた。「また来年まつてるからね。」